

文化・芸術

茂田井武の挿絵と絵本

茂田井武 (1908～56年)

1933年、パリから帰国した茂田井武は、さまざまな職を転々となりました。挿絵画家としてのデビューは、36年、雑誌「新青年」に発表した小栗虫太郎(1901～46年)の探偵小説「二十世紀鉄仮面」の挿絵でした。雑誌廃刊の50年まで、ほとんど毎号挿絵を提供しています。一方、児童書では、41年の「ナニナニ絵本」が初めての仕事となりました。

戦後、茂田井が本格的に童画家としての仕事を再開させたのは46年のこと。以後亡くなるまでのわずか10年の間に、おびただしい数の子ども向けの本と、十数誌にも上る児童雑誌の仕事に取り組みました。特に50年から亡くなる56年まで描き続けた絵雑誌「キンダーブック」(フレーベル館)の仕事は、一点の夕ブローのような風合いの作品と評され、茂田井の記憶と夢とが凝縮された力作がそろっています。(小此木)

大川美術館「茂田井武—パリ青春日記
ton parisを中心に」展から

《名画の扉》

